

R・キング著
森楸・大塚忠剛監訳

『幼児教育の理想と現実』

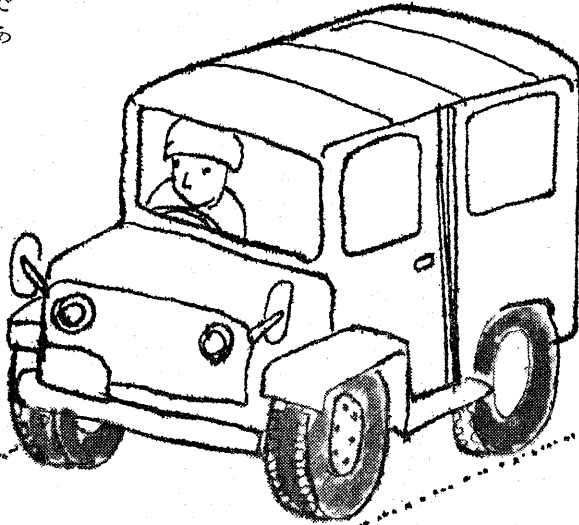
(北大路書房)

学級社会の「新」社会を

豊田 一秀

人間は、なかなか自らを見る事ができないものである。他人の言動と行動の不一致を指摘する事はできても、自分自身については気付きにくい。

一方で、教職という仕事は、仕事の内容とその人、自



身の生き方、考え方の重なる部分が大きい職業であると思ふ。特に幼児教育に関しては、その傾向が強い。この事は、教師が自らの保育を見直す事の困難さにもつながっている。

この本は、幼児教育とは直接畑の異なる教育社会学者が、イギリスの幼稚園（幼児学校）に実際に観察に向出して書いた本である。現場の教師が無意識に持っている「よい子とは」「よい教師とは」といった事に関する教師のいわば当たり前、前観と日々の保育との関係を目の下にさらして、私のような現場の教師にとっては少々辛口な本となっている。

この本の原題“*All things bright and beautiful?*”は訳者によれば、英国国教会派の讚美歌の一節であり、イギリスでは多くの人々に愛唱されているという。ただし讚美歌には付いていない。「？」がこのタイトルにはついていてる点に著者の意図がある。直訳すれば、全てのものは輝き美しいのだろうか？となる。ここでは全てのものは、すなわちイギリスにおける幼児学校を指してい

る。イギリスの「公教育の中で最も優れた部分」であるはずの幼児学校の教育が全てにおいて「輝き美しい」のだろうか、とこの本では問うているのである。

著者キングは「大規模調査、コンピュータにかかれるデータを必要とする研究に満足しなくなつて」三年以上をかけて、三つの幼児学校を観察し、約五十万語にのぼる記録を集めた。観察の方法は本人が「まず初めに私は、身長が社会的距離を作り出すように立つておくことにした（教師が、しばしば同じ高さに身をかがめるやり方に気づいたからである）」と言っているように、非参与観察である。これは著者の関心が子どもよりはむしろ教師に向いている事に由来しているためと言えよう。この点についてキングは「子どもは教師の関心の中核にあるのだから、本研究の中核も子どもである。」と言っているが、私には、やはりこの研究の対象は教師にあると思える。自ら教育現場に向いて行って観察をするという、このキングの方法は社会現象学に基礎をおいており、このアプローチのしかたは社会学の中では「新」社

社会学と呼ばれているようで、それはそのままこの本のサブタイトルとなっている。

さて、著者キングは、この本の読者層を教育社会学の専門家よりは教師、学生といった非社会学者においていると述べている。当然ながら、私自身もこの読者層の一人に入る訳で、その立場からの感想を述べてみたい。

この本の一つのポイントが、イギリスにおける児童中心主義教育が、実際には教師中心主義的な教育になっているのではないかと事例をあげて実証しようとしている点である事については私はすでに述べてきた。例えば「早くしないと遊ぶ時間がなくなるわよ。」「いい子だから、これをして、やってくれるわね、先生のために。」「まあ、恥ずかしいわね、年長さんなのに。」といったこれらの教師のことはかけをキングは教師の社会統制と捉える。この捉え方に対して現場の教師が賛成するか反対するかについてはさて置き、このキングの見方から逆にキング自身の児童中心主義に対する、イメージと言ったようなものが浮き彫りにされて来るように私には思え

る。すなわち、幼児教育の専門家ではないキングが幼稚園での観察を通して、何を見たかを読み取る事で逆にキングの持っている幼児教育観の逆照射をみる訳である。

このような視点で、この本を読む事は、特に現場の教師にとって有意義であると思われる。ある章では著者の指摘に自らの姿を重ねる読者もいるであろうし、他の章では「全く見えていない!」とつぶやく読者もいよう。保育室の匂いのようにくるような事例が多だけに現場の教師を引き込む力は強い。

著者キングが幼稚園を彼の学問的視野で捉えようとしたように、読者もこの本を一人一人の見方で読み取る過程の中で、逆に各人の持っている当たり前観が浮かび上がってくる事と思う。いずれにしても、現場の教師が、日々保育をしている「自分」を見るのによい刺激となる一冊である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)